

コイニア

214号



特集

座談会

「承継」 「主事を通しての」

栗原純人×矢島志朗×塚本良樹

連載



「学生世界のリアル」
つながっていく交わり 島田祐也

「仕事の神学」
ソフトウェアアーキテクト 関山宜孝

学生コラムブロック活動の今
No.3 多摩Qブロック

卒業生会2023年・年間テーマ

KGGKスピリットの
承継



2023 年度コイノニアテーマ
「K GK スピリットの承継」

「主事を通しての承継」

2023 年度コイノニアのテーマは、「K GK スピリットの承継」。6 月のテーマ紹介、9 月の「聖書から考える承継」に続く第 3 回目となる今回は、「主事を通しての承継」を題材にした座談会をお届けします。元主事で理事・関西地区協力会運営委員長の栗原純人先生、K GK 卒業生宣教局の矢島志朗主事と塚本良樹主事に、主事としての活動や、その働きを支えるという視点から「承継」について語っていただきました。

座談会参加者



栗原純人 師
明治学院大学 1994 年卒 / 福音交友会・岸和田聖書教会 牧師 / K GK 理事、関西地区協力会運営委員長



矢島志朗 主事
慶應義塾大学 1994 年卒 / K GK 卒業生宣教局長・研修メンバー / ケア部長 / 日本イエス・キリスト教団 萩窪栄光教会 会員



塚本良樹 主事
今回の座談会の司会者
慶應義塾大学 大学院 2011 年卒 / K GK 副総主事・卒業生宣教局長 / 東京福音センター・多摩ニュータウンキリスト教会 会員

自己紹介
学生時代の思い出

今回は「主事を通しての承継」ということで、主事として奉仕された後、卒業生として、協力会運営委員として、理事として K GK を支えてこられた栗原純人先生（主事→支援者）と、卒業後、栗原主事を支える会幹事として奉仕した後、主事とされた矢島志朗主事（支援者→主事）にお話を伺いたいと思います。まずは簡単に自己紹介をお願いします。

私は 1 年生の終わりに K GK に参加しました。4 年次には実行委員として奉仕したのですが、そのときの委員長が矢島さんで、副委員長が私でした。卒業して 3 年間主事として働いた後、神学校を経て牧師となり、現在は岸和田聖書教会で牧会しています。同時に関西地区 K GK 協力会運営委員を 20 年以上務めていて、10 年ほど前に委員長となりました。また、K GK 理事としても奉仕しています。

私は大学 1 年の最後に教会に導かれ、2 年生から学内や地区に参加し始めました。栗原先生とはブロックのスキーキャンプで初めて出会い、後に実行委員として一緒に奉仕しました。卒業後は行政、神学校、NGO の働きを経て、主事となりました。関東地区、中四国地区、全国担当を経験し今に至ります。

主事としての働きを
共に担う「支える会」

栗原先生が主事になられたとき、矢島主事が支える会の幹事としてご奉仕されたんですね。

栗原先生が主事になると聞いたときは、とても感動しました。仲間なので一緒に働きをするというイメージで、当たり前のように幹事を引き受けました。

矢島さんは支える会幹事会のリーダーとして奉仕してくれました。毎月第三土曜日に報告会を行い、二ヶ月に一回報告レターを作っていました。

今の若手ほど同期会は定期的になかったのですが、栗原主事活動報告会が同期の交わりでの場でした。会社での信仰の葛藤などを分かち合い、また主事の働きを克明に知ることができるよう機会だったと思います。学生伝道の最前線にいる仲間から毎月報告を受けることで、普段別の場所にいる自分も、一緒にミニストーリーをやっているように感じていました。

特にトラブルが多かった 3 年目は、その交わりの中でよくよく話を聞いてもらっていました。気を遣わずにいられる場所で、その中で主事を辞めたいという話までできました。

牧会的なコメントをする同期もいて、信仰の励まし合いの場でしたね。

卒業してすぐだからこそ、同期に支えられました。学生時代交流がなかった仲間も手紙を

くれたりして…。献金してもらったときには、必ず領収書に一筆を入れ、感謝を伝えていました。



その後、矢島さんが主事になりました。



私が牧師になって6年目に矢島さんが主事になりました。支える会幹事の話が当然来ると思っていたのですが…。来ませんでした(笑)



あれ?(笑) 連絡入れなかつたっけ…?



ちよつと寂しかった。



その時は幹事を関東で動ける方をお願いしていて、栗原先生は関西におられたからだと思います。それでも支援者として、はじめからずっと支えてくださいました。



私が理事になったときには、矢島さんは事務局長でした。



各地区の会計実務を全国事務所に移管・委託するやりとりをしていた時期で、栗原先生が尽力してくださいました。立場が変わっても、ずっと一緒にKGGKをやっている感があり、感謝でした。

学生宣教を共通の「軸」として交わりを持ち、励まし合う卒業生会



栗原先生は、どのような思いをもってKGGK理事として奉仕してくださっているのですか。



恩返しとしてやっています。学生時代変えられたのも、結婚もKGGKを通してでした。妻は私の外部奉仕が増えることを心配していますが、KGGKに関しては「仕方がない」というスタンス。夫婦でKGGKを支えていきたいと思っています。



KGGKは卒業後、同期と生涯分かち合い、励まし合える恵みもありますよね。ただ、主事の存在によって、一緒に学生宣教に向かうという軸ができる。主事が立つてくれることで、学生支援が具現化され、それによって交わりがより深まるのだと思います。



卒業生会は、そもそも主事を支えることを通して皆で学生宣教をしたいという願いから始まりました。



卒業し、知らない主事が増えていくとKGGKとの距離が遠のいていきますが、その中で同世代の仲間の主事があると、KGGKとの接点が見出せますよね。



関西地区にはKGGK祈祷会(支えられているデー)という、主事が学生にKGGKの財政について伝え、協力会運営委員が証しをする会があります。そこでは、学生たちに自分の同期から主事が立てられるよう祈ることを励ましていきます。



主事を支える中で、卒業生たち自身も励まされ、KGGKスピリットに生きるようになる。そのことに主事たちも励まされ、よりよく学生に伝えられる。主事を通して学生、ひいては卒業生にKGGKスピリットが受け継がれ、浸透していく、まさに「主事を通しての承継」ということですね。

終わりに



最後となりましたが、卒業生や現役の主事に期待することはあります。



私の学内では、卒業後に救われる方がたくさんいました。ですので、卒業するまでに救われなかった学生時代の友達に関わってほしいと思います。また、関西地区協力会運営委員の一人が最近、「自分たちの励ましや支援のアピールだけで、学生の方に目が向いていないのではないか」という問題提起をしてくださりました。主事には、支える会の交わりの中で、卒業生による遣わされた地での伝道を励ますとともに、卒業生が学生の方を見られるよう、働きや状況、課題をもっと伝えていただけると嬉しいです。



主事になって数年後、同世代の仲間にお礼を伝えたら、「僕の方こそありがとう。自分が行くべきところを代わりに学生のもとに行ってくれている」と言われました。そのことは、中四国地区を一人で運転し巡回するなかで孤独を覚えるとき、心に響き続けました。KGGKスピリットは「遣わされた地で福音に生きる」ということばに集約されていますが、学生時代にそれをやり抜くと、職場・家庭・教会で福音に生きるとともに、後輩を支える、次の世代に承継していくという応答になっていきます。その具体化の一つが、主事を立てて学生のもとに送り出すことです。宣教の働きを通して神様がくださる祝福を主事と一緒に受け取れると思いい、ぜひ学生宣教に参加してほしいと願っています。

卒業生会

お知らせと報告

卒業生役員
リレー連載
シリーズ
KGGK
スピリットの
承継

教会を愛し、
建てる上げる



17年跡見学園女子大卒
吉田明理

私は所属教会での教会学校（以下CS）奉仕を大学時代から現在まで続けています。それは学生時代KGGKの3本柱のうちの1つである「超教派」、①礼拝共同体としての自分の所属する教会から送り出されていること、②キリストのからだである教会を愛すること、③キリストのからだです。当時の私には自分の教会を大切にし、自分自身が教会を建てるメンバーであるという考えはあまり持っていませんでした。しかし、KGGKへ送り出してくれている所属教会に積極的に関わり支える為に、教わった事を素直に受け取ってCSの奉仕を始めることにしました。

そして現在、その当時担当していた小学生達は大学生となりました。新入生となった彼らに、顔を合わせる度にKGGKに誘い「主事から連絡は来たか?」「ブロックは行った?」等聞くので、他の青年達からは微笑されています...

しかし、それでも声をかけ続けるのは、KGGKで私が受けた恵みを彼らも同様に受けて欲しいからというだけではなく、KGGKは神様から出た大切な宣教の働きだと知っているからです。

こうして教会から送り出された彼らはKGGKに積極的に関わり、ブロック役員を担

たり、キャンプで受けた恵みを分かち合ったりしてくれま

さらに、今年から一人の大学生の女の子が、CSの奉仕と一緒に担ってくれることになりました。彼女は私が学生時代にCSで担当した小学生の一人で、今はKGGKに積極的に関わっています。学生時代に私がKGGKで受け取った事を、今度は彼らが受け取り、CS奉仕を通して一緒に教会を建て上げていく恵みに預かることが出来感謝しています。

KGGKの真価が問われるのは卒業してからだと思えます。卒業後は忙しく、たとえKGGKのイベント等に参加出来なくても、学生時代に学んだKGGKスピリットを固く握りしめ、それぞれが遣わされた教会を建て上げていく。そういう卒業生を生み出すことが大切なのではないでしょうか。私自身もKGGKで学んだ、キリストのからだである教会を愛する「超教派」を自分の教会で実践する卒業生でありたいと願わされます。

私の働きはほんの小さなものですが、神様の宣教の働きに参与することが出来感謝しています。当然奉仕の中での悩みは様々あります。それでも教会を愛し、教会から学生達をKGGKへと送り出し、KGGKの為に祈り支える卒業生であり続けたいです。

若手卒業生集会の証



23年東京家政学院大卒
神谷瞳

今年度から新しく始まった若手卒業生集会は、大学4年生から卒業後7年目までの卒業生を対象に、毎月第4金曜日にOCCビルで開催しています。どの卒業年度からも満遍なく、集会には40〜50人、聖研には15〜20人が集っています。

私は、今年の4月から建築設計会社で図面を描く仕事をしています。初めての社会人生活は学生時代とは全く違い、慣れない中で毎日疲れ果ててしまい、ストレスが溜まっていきました。そのせいなのか、体調を崩していくつか病院に行ったり、家に帰ってきてからも仕事のことや悩みが絶えず、神様に向かって「仕事を辞めたいです」と泣きながら祈ったことが何回もありました。そんな中、家族や教会で親しくしている先輩方が祈り支えてくれていました。

このような私にとって、若手卒業生集会ではなくてはならない集会です。私と同様新社会人になって苦労しながらも神様に祈りつつ仕事や学業を頑張っている同期や、社会人になって数年の先輩方など、様々な人と神様の恵みを分かち合い励まし合うことができるからです。

8月の集会では、マルコ7:1〜13から吉村直人先生がメッセージを語ってくださいました。「聖書の御言葉は真つ直ぐ受け取る必要があるが、真つ直ぐではない解釈の抜け道を、自分流の信仰のあり方で勝手にアレンジしてしまつて、結果的に神様から離れてしまつていくことはないだろ

うか」という、自分自身の神様と聖書の向き合い方について改めて考える良い機会となりました。

集会では各月でメッセージと聖書研究を交互に行っているのですが、聖書研究でもじっくり神様と聖書と向き合い、恵みを分かち合う良い時となっています。

クリスチャンの同世代の仲間と祈禱課題をシェアすることによって、悩んでいるのは自分だけではなく、同じように仲間も神様に祈りつつ毎日を歩んでいること、折り合えること、そして私たち一人ひとりに、神様が実際にいつも共にいて働いて下さっていることが分かります。遅い時間帯にも関わらず出席してくださる塚本良樹主事にも感謝しています。

ちなみに、私が学生時代から入っていたZOOMでの建設祈禱会での交わりも、大変励まされて毎月の楽しみとなっています。



若手卒業生会集會



JCE7に参加した主事たちと倉嶋理事長

キリストの教会を建て上げる卒業生たちの姿

9月19日から22日まで、岐阜県で開催された第7回日本伝道会議(JCE7)に参加してきました。13名の主事・GAが参加し、私は宣言文作成委員と聖書講解の担当の一人として奉仕させていただきました。他の主事たちも、開催地委員や分科会担当、証し者、司会者、通訳者など、様々な奉仕をさせていただきました。主事たちの活躍もさることながら、大活躍していたのが卒業生たちです。KKG卒業生で、牧師として、宣教師として、宣教団体スタッフとして奉仕されている方々はこんなにも多くいてくださるのかということ、改めて実感しました。

当然のことながら、キリストのからだなる教会を建て上げるのは、牧師や宣教師、宣教団体スタッフだけではありません。一般の企業・団体での仕事という神の国建設を通して、そしてあらゆる奉仕、特に地域教会で礼拝を捧げるという奉仕を通し

て、教会を建て上げておられる卒業生が多くいてくださることはKKGの最大の強みです。ただ、それと同時に、教職者として奉仕する卒業生を多く送り出していることも、本当に感謝なことです。

期間中、一つのキーワードとして分かち合われた言葉が「危機」です。特に、多くの教団・教派で若者がいなくなったり、牧師が不足したりという課題があります。そのなかで、多くの方がKKGに期待してくださっているのだということを実感しました。これからも、KKGに集う学生たちが、信徒であっても教職者であっても、福音の豊かさを知り、キリストの教会を建て上げ、全生活・全生涯にわたって福音に生き続ける卒業生とされていくために、愚直に、地道に、交わりを励ましていきたいと改めて心に刻むときでした。

富樫 由美子

○ 最近、相手に言えてなかった一言は？
一緒にいれるだけで嬉しいよ、いつもありがとう。

○ 相手を聖書の人物に例えると？
わりと自分のことは後回しにするタイプなので、マルタかな!?

○ 相手と過ごした大切な時間は？
娘が生まれた瞬間からずっと。いま現在も大切な時間です。

○ 子供に受け継いだ大切なこと
美味しい・楽しい・嬉しいなどの言葉は声に出して伝えようね、と教えました。

○ 相手がいることで「助かっているなあ」と思うことは？
困ったことがあるとナイスなアシストをしてくれる。



富樫 夏美

○ 最近、相手に言えてなかった一言は？
たまには自分を優先させてね。息抜きにはいつでもお供します!

○ 相手を聖書の人物に例えると？
子どもを授かるまで長い時間がかったそうですが、待ち続けてくれていたところがハンナと重なります。

○ 相手と過ごした大切な時間は？
直近だと8月に大阪へ2人旅した時間。

○ 親から受け継がれた大切なこと
楽しい時ほど気をつけなさいとよく言われました。小さい頃夢中になって遊ぶあまり、よく膝を擦りむいていたので…

○ 相手がいることで「助かっているなあ」と思うことは？
アクシデントが起こっても、明るさとポジティブさを使って立ち向かうところ。

母 富樫 由美子

教会 行徳キリスト教会
仕事 専業主婦
家族 夫と娘3人
趣味 スポーツ観戦
(特にバレーボール、バスケ、テニス)

好きな食べ物
お寿司・辛いもの・甘いもの・果物

娘 富樫 夏美

教会 行徳キリスト教会
仕事 大学職員
家族 両親、妹2人
趣味 スポーツ観戦、歩くこと、ボイ活

好きな食べ物
チーズ、いも、ぶどう

関山宜孝



N. Sekiyama

名古屋大学大学院2010年卒(修士)
勤務先:Amazon Web Services Japan
役職:Principal Big Data Architect, AWS Glue



Theology of Work

仕事の神学

わたしは神から何を任されているのか
神の世界において何のプロフェッショナルとして召されているのか
キリスト教の視点でわたしたちの仕事に「神学」するリレー連載

Professional

ソフトウェアアーキテクト

関山宜孝にとってソフトウェアアーキテクトとは

神様の知恵と助けを借り、人を助け人の日常を支える仕事

ITの道を志してから約20年。今はAmazon Web Servicesという、amazon.comや他社のお客様のシステムの基盤となるソフトウェアを開発する仕事をしている。メンバーのほとんどは米国で働く中、ひとり東京からのリモート勤務。不得意な英語と時差に悪戦苦闘しながら、ソフトウェアアーキテクトとして日々働いている。

現代の日常生活に欠かせないスマートフォンやパソコンは、ソフトウェアでできている。そういったデジタル技術はしばしば「この世」的な存在として語られる。当然、聖書には登場しない。天地創造からかけ離れた領域にも思えるかもしれない。それでも、私はキリスト者として、聖書の世界観からこの領域に携わり続けたいと願っている。

ソフトウェア技術者といえば、昨今ではキラキラしたイメージで取り沙汰される。しかし実際の仕事は泥臭いもの。毎年ラスベガスのイベントで華々しく発表する新製品も、日々正解の分からない中で議論を尽くし、一行

一行書き続ける膨大なプログラムコードの果てに、度重なる試行錯誤が結実して生まれる。

多数のお客様のシステムダウンにつながる緊急性の高い障害が起きると、私のiPhoneはマナーモードを貫通して爆音を鳴らす。時には、業界を席卷するセキュリティ脆弱性が報告され、緊急対応のために夜間休日問わずに作業することもある。

この仕事で印象に残っていることがある。コロナ禍が始まり世界中で死が蔓延していた2020年、当時のGeneral Managerから私宛に緊急の電話があった。「アメリカでは今日も信じられない数の人が死んでいる。」「自分たちにできることをしよう。今すぐに。」その電話は午前3時まで続き、そこから数日間の突貫工事でCOVIDデータレイクというシステムを開発した。ニューヨークタイムズなど複数の外部機関から、各国のCOVID-19の感染者数や死者数、ワクチン接種者数などのデータを収集・加工して、研究者や技術

者がデータ分析できる環境を提供する仕組みだ。プレッシャーが非常に強く、緊急性の極めて高いプロジェクトだったが、これまで培ってきたソフトウェア技術が、自分のちっぽけな予想を大きく超えて人を助ける光景を見た。

「プログラムは思った通りには動かない。書いた通りに動く。」という言葉がある。コンピュータは私の考えを忖度してくれない。熟慮を重ねて書いたプログラムにも大抵バグは残る。一方で、何も無いところから神様が創ったこの世界にはバグはない。人間の限界と神様の完璧さの間に深い隔絶を感じる。それでも、神様の知恵と助けを借り、人を助け人の日常を支えるために、今日もプログラムを書く。



Unsplash・Sigmund撮影

『女性のほんとうのひとり立ち』

いつまでもいきいきと生きるために』 湊晶子 [著]、いのちのことば社、1984年



ブックレビュー

湊晶子

女性のほんとうのひとり立ち

湊先生は私の敬愛する恩師です。女性ならではの数々の困難にぶつかっても、「私を強くしてくださる方によって、私はどんなことでもできるのです。」(ピリピ2:13)のみことばの通りに生き続ける先生は私の憧れです。
本書は、どのような状況にあっても神様との人格的な交わりに生き、しなやかに乗り越えるためのアドバイスに満ちています。

男女雇用機会均等法成立後に生まれ、「性差のない教育を受けてきました。それが知らず知らずのうちに自分を中性化(男性化?)していったということに、大学時代に初めて気付きました。そして自分の中の女性的な面よりも男性化した部分こそ、社会の中では評価されてしまうという哀しい現実にも、しかしキリスト者である私は、神様に女性として創られた自分の姿をもつと喜べるようになりたいと思いました。

先生との出会いがなければ、女性として、妻として、母として生きることが、こんなにも喜びをもって受け入れられなかったでしょう。特に育休中の今を、自分のキャリアの一部として肯定的に認められなかったと思います。これからも先生のように、神様に女性として創られた自分を喜び、自由にしなやかに生きたいと願っています。

紹介者

ロバートツヤカ(旧姓高木)
東京女子大学卒
学校事務(育休中)

学生世界のリアル

主事の働きを通して知る、今のKGG。
主事の視点から見る、学生宣教の最前線。

世界宣教部長
留学生宣教責任主事

島田祐也

担当
教会

お茶の水ブロック
JECAかもい聖書教会



「私、このために夏期学校に来たんですね。」喜びの涙とともに学生が言う。卒論の内容の相談から話に花が咲き、将来の夢、願い、希望を分かち合った。神様から与えられた学びと志と情熱がつながった瞬間。いつの時代も神様から与えられた自分のユニークな召し、賜物、人格に気づくことほどの喜びはない。主事である私にとっても、こうした学生の自己発見と、自分を見出すことによって自分の創造主を見出す喜びをともにすることほどの喜びはない。

つながっていく交わり

今年の夏期学校は、コロナ明け、対面開催2年目。去年はフリータイム中、学生から全く相談を持ちかけられることなく、部屋でヘンリー・ナウウエンを片手に静まっていた私だが、今年は何人かの学生と深い人生の話、葛藤や喜びを分かち合うことができた。対面で持ってきた交わりの結果、ようやく関東地区全体の雰囲気も温まってきて、主事と学生の距離感も縮まってきた証だろう。

相談のひとつは、卒論の内容。私が興味関心のあるテーマだったため、フリータイム中に話すことになり、そこからその学生の興味関心、進路選択、神様から与えられている志や情熱に話が広がった。質問を重ね、語り合ううちに、聖霊が思いがけない気づきを与えてくださった。その学生が今学んでいること、将来したいこと、神様にどのように仕えていきたいかという願いが一直線につながる瞬間があった。それが冒頭の一言につながる。

すべての学生、すべての人が、今していること、将来していくこと、これまでしてきたことがまるでもひとつの壮大なドラマかのようにひとつにつながる時に出会えるわけではないかもしれない。私たちの多くは、今していることの意味が何だったのか、人生のあの時期、あの瞬間の意味は一体何だったのか、問いながら悩みながら葛藤しながら、答えも与えられずに人生の旅路の多くの時間を過ごす。

しかし、時には、自分の人生を静まり振り返る中で、あるいは、兄弟姉妹との親しい交わりの中で、こうして様々なバ

ラバラに見える点と点がつながり、ひとつの意味をなすまとまり、物語、神様の目には見えている全体像の一端を垣間見ることがある。その時私たちは、自分の造られた意味、神のかたちに造られた自分という存在のユニークな人格、賜物、召しの一部を知る。その喜びはいつの時代もどんな人にとってもひとしおであるが、特に学生にとってその喜びはかけがえのないものだと思う。

「あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ。」(伝道者の書12:1)

ほとんどの場合、こうした瞬間は、作り出すことができない。神のハプニングとして起こる。恵みとして与えられる。しかし、私たちがそうした聖霊が働くスペースを造ることはできる。神のことはをともに開く親しい人格的交わりを持つていくことによって。

コロナによって「断絶」した交わりが少しずつ、つなぎ直されているこの時期。夏期学校のような機会が、開かれた心と開かれた神のことがを伴う人格的交わりを持つ場となっていくことを願っている。





ブロック活動の



関東

No.3 多摩Qブロック

過去

Past

Present

未来

Future

多摩Qブロックは、多摩☆ブロッコリーと小田急線ブロックが合わさったブロックです。2つのブロックは独立していましたが、活動場所が近いことから合宿は元々合同で行っていました。2021年度から、それぞれのブロックで役員を立てるのが難しい状況になり、一緒にブロック活動を行うこととなりました。多摩Qは複数のキャンパスを持つ大規模学校の他に、小規模の学校も所属しており、一人学内（一人で活動している学内）も何校かあります。

私は多摩Qブロックになった2年目からブロック役員をしています。昨年は多摩・小田急のそれぞれ以前から使わせていただいている教会で活動していました。しかし、活動場所を固定した方が集まりやすいとの意見から、今年は毎月のブロック祈禱会を多摩ニュータウンキリスト教会で行っています。祈禱会を多摩側の教会で行うことから、聖研を行うときは小田急側の教会を使うなどの工夫をしています。

毎月のブロッ祈に20～30人が集まっています。少なすぎず、多すぎない人数で、濃い交わりを持っていると思います。いくつかの大学が一つの駅に集結しているため、他の学内活動に参加したり、集まってお気に入りのラーメン屋に



行ったりすることもあります。また、大きな特徴として役員が5人、主事が2人立てられていることがあります。分担しながらブロックに集う一人ひとりと連絡を取り、フォローアップに力を入れています。

そんな多摩Qは昨年から、この先どのような形で活動をしていくか祈り求めています。多摩☆ブロッコリーと小田急線ブロックで分かれて活動していたときの学生は現4年生と院生のみになりました。1～3年生は「多摩Qブロック」として集まり、共に神様を見上げていた仲間です。いつかは分かれるべきなのか、はたまた多摩Qとして続けていくべきなのか分かりません。神様の計画を求め、祈り続けたいと思います。

最後に、今年の9月に「交わりと宣教」をテーマに行った多摩Q合宿を通して、伝道したい、役員をしてみたい、そしてKKG会員になる決断をした人たちが与えられたことを分かち合いたと思います。新入生もこれらの思いを打ち明けてくれました。私の中でも多摩Qでの交わりを通してともに神様を見上げ、信仰を励まし合っていきたいという思いが一層強まりました。遣わされている大学で福音に生きているブロックのメンバーが、一步踏み出す場としてブロックが用いられるようにお祈り頂けると幸いです。

恵泉女学園大学4年 井上春菜



キリスト者学生会 関東地区卒業生会誌

コイノニア

2023年11月
214号

編集委員：阿部聖香、稲垣新、岩瀬ふらの、河野言葉、桑島大志、小谷枝薫、道法涼子、西村信幸、林直也、吉田明理、塚本良樹（主事）

発行：キリスト者学生会関東地区卒業生会

東京都千代田区駿河台 2-1 OCCビル 402 号室

TEL/FAX：03-3294-6916/6050 郵便振替：00170-1-83649

発行部数：1600部 / 年4回

【編集後記】

『コイノニア』の各コラムは、大小にかかわらず、神様に出会い、生かされている経験が語られています。そこには、神様と膝を突き合わせるような深い交わりもあったと思います。編集委員として前号から関わらせてもらい、普段から「言葉と向き合うこと」が増えました。色々な情報に気を散らすのではなく、今そこにある言葉を読み解き、考え、味わうこと。それが、私自身の信仰生活にとっても励みになっており、改めてこの奉仕に携わる喜びを感じています。（稲垣）